

## 保育者アイデンティティの形成過程

大野 和男（児童学科・准教授）・小泉 裕子（児童学科・教授）

### I. 本研究の問題

これまで、「保育者アイデンティティの形成に関する研究」において、Erikson(1959)の生涯発達理論における青年期の発達課題と結びつけ、実習生が保育者である自己と向き合い、自身の保育者に対する適性を自覚し成長するプロセスを、「実習生の保育者アイデンティティの形成過程」とし、その後の保育者アイデンティティの成長に連続していく重要な成長過程であることを質問紙調査により明らかにしてきた。

そして、初期のステージである実習の段階からその萌芽が培われ形成されるものを、「プレ保育者アイデンティティ（私は保育者になる）」（小泉・田爪，2005，2007）と定義し、研究を進めてきた。保育者を目指す上で、保育に対する明確なイメージを持ち、子どもにどのように接するかを意識することは重要であり、学生のうちに保育者としてアイデンティティを確立していくことが必要である（大野・小泉，2014）。

プレ保育者アイデンティティの形成には、学外実習がその発達に甚大な影響を与えている。松本（2008）によれば、実習は、理論的側面、技術的側面から学生自身が子どもに対する理解や実習施設への誓いを深めていくことを、身をもって体得していく過程である。これに関して、実習先の指導者の効果（小泉・田爪，2005）、養成校と実習園の相互理解にもとづく連携的な実習生指導の効果（田爪・小泉，2007）等、検討されてきている。

また、プレ保育者アイデンティティにおいて、実習に対して自身がどのような評価をしているかという視点も重要である。保育所保育指針（2008）においても、子どもの保育および保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように自己評価が求められている。松本（2007）は、実習評価についての実習園側と学生の評価の比較を行っており、実習園の評価よりも学生の自己評価の方が全体的に高いことを見いだしている。

さらに、高橋ら（2011）は、幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と自己の自己評価の関連について、「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から検討している。「教材研究」については、教材研究に習熟していると自己評価して教育実習に望んだ学生は、保育者の保育実践を省察し表面的な保育行為ではなく、その保育行為を支えている指導意図を理解し、かつ、子どもの活動に応じた保育者の援助の仕方と把握できたと考えている者が多いこと、「教材研究」の中でも特にピアノの習熟が配属・指導計画・保育技術に関する満足度に重要であること、教育実習前に「子どもの気持ちの読み取り」について習熟している学生は、教育実習体験において対保育者・対子ども・保育実践に関する達成度が高いこと、を明らかにしている。

一方、専門性を質的に高め、プレ保育者アイデンティティ形成に寄与するための養成教育及び新規採用者研修（現職教育）のあり方にも注目されている。養成校で学び、プレ保育者として巣立った者達は、専門的には未熟な段階であるにもかかわらず、新規採用者として現場に立ち、経験者と同様の業務内容に従事していく。Vander, Ven の保育者の発達

段階モデルの仮説（秋田，2000）に引用されるように、最初の段階として実習生から新任の段階を同様の段階と捉え、「園の中で一人前として扱われておらず、場に参加することから学ぶ段階であり、指示されたことをその通りにやってみるアシスタントになったり、直接関わり援助や世話をすることから携わる」段階と言える。

そこで、本研究では、成長プロセスの中で獲得される保育者アイデンティティの問題のうち、特にプレ保育者の時期であるファーストステージ（実習生から新任期）を取りあげ次の視点で研究を進めていく。

学生は、養成校在学中に数回の教育・保育実習を経て段階的にプレ保育者アイデンティティを形成していくと考えられるが、個々の学生に起こっている経年変化、実習毎の変化は先行研究では明らかにされていない（大野・小泉，2014）。小泉・田爪（2005）は、「私は保育者になる」という職業決定動機に注目してきたが、個々の学生の職業的能力、とりわけ実践的知識と技能の自己評価（セルフアセスメント）にもとづくプレ保育者アイデンティティの実態調査は明らかにしていない。

これらのことから、学生が実習前に実習に関してどのようなことが不安や心配なのか、また、保育者としての様々な能力や技術をいつの時点で習得すべきかと考えているかを捉える。そして、実習後の自己評価の有り様を検討する。保育者自身の「自己評価」が問われる現在、実習生段階のプレ保育者による自己評価の実態を明らかにする必要性は充分にあると考えられる。

## II. 方法

調査対象として、K大学の保育者養成系の学科に属する平成27年3月卒業の女子学生を対象とした。保育実習・教育実習を行う前の2年生の時に、実習に行くにあたって「不安や心配なこと」を「とても心配」から「全く心配でない」の5件法で、保育者の能力や技術の習得時点を実習前・実習中・実習後（大学卒業まで）・就職後の4段階で尋ねた。このときの対象者は、147名であった。

さらに、平成27年1月に、自己評価の22の尺度について、「はいとてもーいいえ全く」の5件法で尋ねた。各尺度は、複数の下位尺度から構成されている（Table 1.）。今回検討する自己評価の項目に関しては、現場の保育士が活用している「自己評価チェックリスト」（民秋，2005）を参考にし、実習生に適合するように項目を修正した。この時点の対象者は、128名であった。

なお、どちらの調査に関しても、他の質問項目が含まれているが、今回の分析では使用しなかった。

分析には、IBM SPSS Statistics21を用いた。

## III. 結果

### 1. 実習前の「不安や心配なこと」

Figure 1. に、結果を示した。どの項目に関しても、心配に思っている学生はかなりの割合で存在したが、「保育者の雑務の補助」「生活態度」に関しては比較的少なかった。それに対して、その他の項目に関しては、心配に思っている学生の割合がかなり高かった。特に高いのは「責任実習の計画」である。「とても心配」な学生が68.1%、「心配」な学生

Table 1. 質問紙の項目

|                              |      |
|------------------------------|------|
| 実習についての全体的な評価                | 13項目 |
| <b>I. 実習前・実習前の作業の自己評価</b>    |      |
| 1) 学内のオリエンテーション              | 4項目  |
| 2) 実習園でのオリエンテーション            | 3項目  |
| 3) 事前の準備                     | 9項目  |
| <b>II. 実習中・実習内容についての自己評価</b> |      |
| 1) 実習生としての姿勢                 |      |
| (1) 勤務態度                     | 11項目 |
| (2) 実習への意欲・取組み               | 6項目  |
| (3) 保育者(指導担当職員)との関係          | 9項目  |
| 2) 発達の援助                     |      |
| (1) 子どもへの対応                  | 7項目  |
| (2) 責任実習(全日・部分)の計画・実施        | 14項目 |
| (3) 指導の技術                    | 25項目 |
| (4) 実習日誌の内容                  | 10項目 |
| 3) 安全管理                      | 5項目  |
| <b>III. 実習後の自己評価</b>         |      |
|                              | 4項目  |

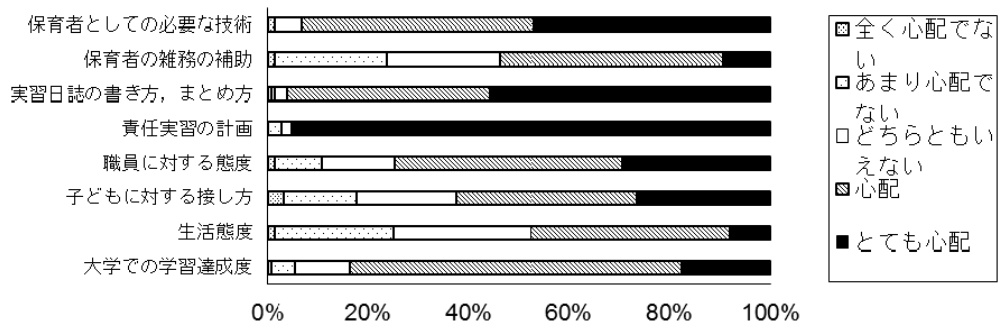


Figure 1. 実習に行くにあたって「不安や心配なこと」

が28.5%と、その割合が圧倒的に高かった。その次に心配な割合が高かったのは、「実習日誌の書き方、まとめ方」である。「心配」「とても心配」を合わせればほとんどの学生が心配に思っていると思われる。「保育者としての必要な技術」に関しても、かなり高い割合で心配だという学生の割合が高かった。「大学での学習態度」に関しても、8割近くの学生が心配に感じていた。

## 2. 保育者の能力や技術の習得時点

次に、保育者の能力や技術の習得時点について、実習前から就職後の4時点のどの時点で習得しておくべきかと考えているかについて検討した (Figure 2.)。最も多かったのは、実習前であり、22項目中11項目という半数を占めていた。特にその割合が高かったのは、「保育者としての明るい性格」「保育者として必要な体力」「社会人としての常識、礼儀作法」といった、どちらかという学習によって身につくものではない、もともと持っているべき素質といったものであった。「ピアノで弾き歌いの力」も高く、長い時間をかけて身につけるべきものが実習までに身につけているべきものと認識されているようである。

それに対して、実習中に習得すべきと思われる項目は意外に少なく、22項目中5項目であった。その5項目とは、「日誌を書く技術」「環境を構成する力」「子どもの食事への指導」「子どもを観察する技術」「子どもと遊ぶことができる力」である。机上ではなく、実際に行うこと、そして、保育者に指導を受けながら身につけていくべきことと認識されていると思われる。

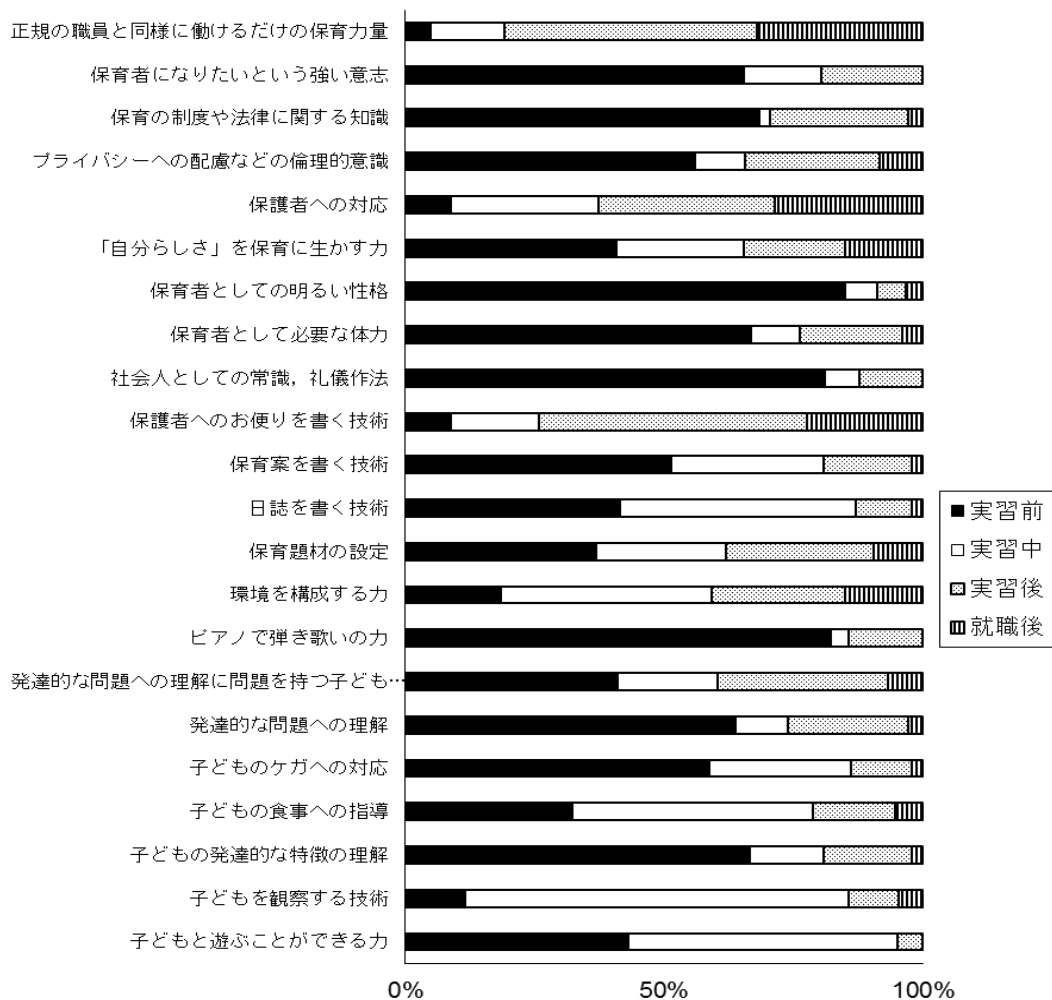


Figure 2. 保育者の能力や技術の習得時点

就職後に習得すべきということが高い割合を示すものは少なかったが、「正規の職員と同様に働けるだけの保育技量」「保護者への対応」「保護者へのお便りを書く技術」といった、大学や実習中には学ぶのが難しいと思われる項目でその割合が比較的高かった。

### 3. 教育実習に関する自己評価

Figure 3. に教育実習に関する自己評価を示した。各尺度は、項目数が異なるため、各尺度に含まれる項目を合計し、項目数で割った値を示した。よって、どの尺度においても、1から5点の間で示されている。どの尺度においても、自己評価は比較的高かった。この中で自己評価が最も低かったのは、「事前の準備」であった。

しかし、この自己評価に関しては、分散がかなり大きく、個人差がかなり存在すると思われた。そこで、この結果を箱ひげ図に示したのが Figure 4. である。各尺度ともばらつきが大きいのがわかる。最もばらつきが大きかったのは前述の「事前の準備」であるが、ほとんどの他の尺度においてもばらつきがかなり大きい。2番目に大きかったのは、「保育者指導担当職員との関係」であった。学生の話聞いてると、保育者が実習背に対してどのように関わってくれたかが自己評価に関わる可能性があるかもしれない。大多数の実習生の自己評価は高いものの、ほとんどの尺度で外れ値が存在することから、実習生の中には、自己評価が低い者も存在することがわかる。

これらのことから、就職が内定している1月の時期は、全体的には、実習に対する自己評価得点は極めて良好であることがわかった。項目毎の平均値プロフィール (Figure 3.) からも明らかだが、「事前準備」が至らなかったことへの反省と「日誌」を記述する際の方法や内容への不安(実習日誌の内容)、「責任実習」「指導の技術」に関する自己評価が相

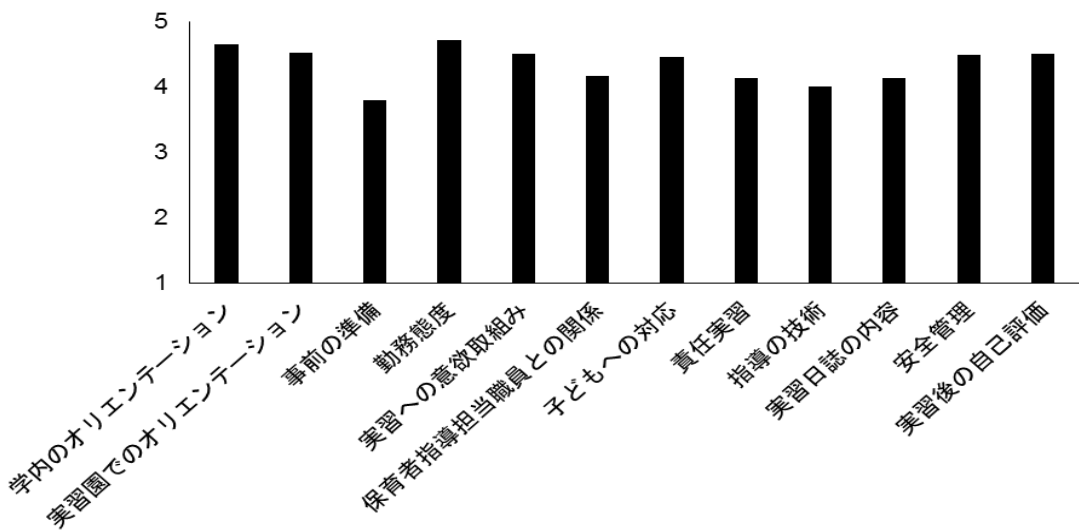


Figure 3. 教育実習に関する自己評価

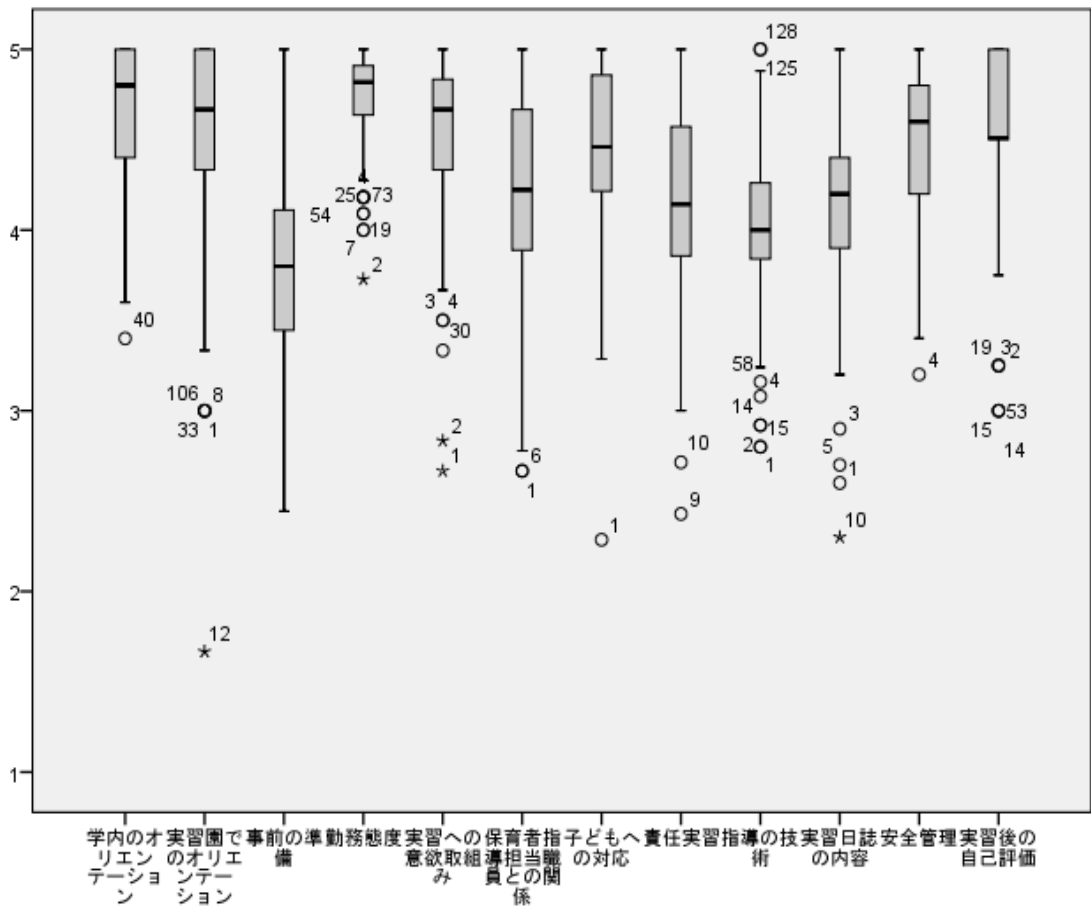


Figure 4. 自己評価についての箱ひげ図

対的に低いことが示されたものの、実習に臨んだ過去の自分を振り返った時、「実習では成果を上げた、やり遂げた」と概ね肯定的に実感し就職を決定していると考えられる。

この調査から浮かび上がったプレ保育者は、準備を積極的にしたわけではないが、実習に向かう姿勢は真面目で意欲も高く、子どもとの関わりや責任実習への関心が高く、記録はまだ未熟であるが、実習生としての指導技術には満足しているイメージを持っていると思われた。

本研究の対象者は、中には自己評価の低い者も存在するものの、総じてプレ保育者アイデンティティを良好に獲得した集団と言えるだろう。この結果は予想を遙かに上回る結果である。このことは、養成教育が一定の成果を挙げたと結果とも考えられ、養成校の教員にとって大変興味深い結果といえよう。

しかし、肯定感が高いために、着任後に陥る自分のクライシスについて自ら予想することは、この時点では予測不可能だと思われ、そのことは、却って問題ではないだろうか。むしろ、事前にクライシスを想定したファーストステージをイメージする「クライシスの構え」を持つ必要があるのではないだろうか。この問題は、今後の保育者養成側の課題として指摘したい。



#### IV. 総合考察

以上の研究結果から、プレ保育者の就職直前の実態を経て新任1年の成長過程におけるファーストステージ・クライシスの実態を見てきた。

就職直前のプレ保育者達は、学生時代に経験した保育職への様々な不安な問題や躓きについて、実習を経験しながら乗り越える中で就職を決定していく。「実習は真面目に参加した。一生懸命に行った。実習生なりの専門技術を発揮できた。」という概ね良好な自己評価をし、ある種の自信や肯定的な意識を携え保育現場に巣立っていくことが、今回の調査で分かったことは、養成に携わる筆者らの安堵する結果である。

しかし、その一方で、着任と同時に「プレ保育者としての自信」は大きく揺さぶられることも明らかであり、プレ保育者のアイデンティティ発達過程は直線的な軌跡ではないだろう。保育現場特有のファーストステージ・クライシスを経験しながら1年を経過する中で、同僚の支えや子どもからの信頼といった保育現場特有の第三者からの肯定的評価を実感することにより自信を身につけ、プレ保育者アイデンティティを形成していくことが推察される。今回研究の中で、1年のうちで「就職後の危機を如何に乗り越えるか」が、その後の成長に影響するのではないかと考察されることは興味深い結果である。このことは、就職後にある新採用者研修の在り方に示唆を与えるものではないだろうか。

最後に、養成校・実習園・就職園のプレ保育者養成パラダイムの限界を指摘したい。従来の熟達化理論に基づいた人材育成ではなく、現在の保育者に求められる「幼児を深く理解し子どもに寄り添う」姿勢を範とし、若きプレ保育者の心と身体の変化や実態に寄り添った、個々の保育者にあった多様な人材育成を心がけなければならないと思われる。

それと共に、プレ保育者達にも新たな姿勢が求められるだろう。すなわち、直面するクライシスを否定的に捉えるよりも、自らの成長過程を長期的に捉え「ファーストステージ・クライシス」が、保育者としての成長過程の一側面であることを、自ら受け入れながら従事することが重要ではないだろうか。

プレ保育者の問題は人材育成の問題であると共に、保育者自身の専門性育成の問題でもある。双方が歩み寄ることこそ、これからの保育現場の未来を形成する鍵となるであろう。

#### 引用文献

- 秋田喜代美 (2000) 『保育者のライフステージと危機－Vander, venの5段階モデル』 発達83, 48-52, ミネルヴァ書房
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the life cycle*, International Universities Press. (小此木啓吾 (訳編) (1973) 『自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル』 誠信書房
- 小泉裕子・田爪宏二 (2005) 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究－保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連－, 鎌倉女子大学紀要第12号, pp.13-23.
- 厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針－平成20年告示』 フレーベル館
- 松本学 (2007) 教育実習・保育実習における学生自己評価と幼稚園評価・保育所評価に比較考察 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 28, 63-72.
- 松本学 (2008) 教育実習・保育実習における学生二年間の学生評価の考察 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 29, 57-80.

- 大野和男・小泉裕子（2014）保育者アイデンティティの形成過程，鎌倉女子大学学術研究所報，14，35-40.
- 大野和男・小泉裕子（2015）保育者アイデンティティの形成過程，鎌倉女子大学学術研究所報，15，55-59.
- 柴崎正行・足立里美（2009）保育者アイデンティティに関する動向と展望－日本における保育者アイデンティティ研究，大妻女子大学家政系研究紀要，33，65-75.
- 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美 2011 幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と自己の自己評価について－「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から－ 東京家政大学研究紀要，51（1），7-13.
- 田爪宏二（2012）保育者養成課程の大学生における保育実習の印象及び就業意識の希望進路による差異－保育者アイデンティティの確立の視点からの検討，鹿児島国際大学福祉社会学部論集，30(4)，44-57.
- 田爪宏二・小泉裕子（2012）保育者志望短期大学生における「保育者アイデンティティ」の確立を規定する要因の検討－実習終了後における保育者のイメージ及び就業意識の調査から，保育士養成研究，29，11-20.